

4

ゲーテと医療（第6報）

—その作品にみるゲーテの医師観と医学教育理念について—

鈴木 重統

北海道大学医療技術短期大学部 名誉教授／介護老人保健施設 ゆう

はじめに

ゲーテが医学に興味をもったきっかけは、彼が学んだシュトラスブルク時代に遡る。彼は、「詩と真実」第2部第9章のなかで「医学生たちの勉学の対象は最も感覚的であると同時に最高のものであり、最も単純であると同時に最も複雑である。人間全体として取り組まなければならない。」と述べている。ゲーテは、ウイルヘルムマイスター（以下ウイルヘルムと略）を外科医にするように教育するように作品を描いているが、その過程におけるさまざまな場面や他の数多くの作品の中から彼の求めていた医師像について言及して考察を加えたい。

ウイルヘルムの修業時代に学んだ「生を思え」（Gedenke zu leben）

ウイルヘルムの修業時代の第8巻第5号の「過去の広間」における叔父の碑名「生きることを思え」をモットーとするものが多くこれが彼の考え方の基本である。事実、彼の息子が地崩れのために落馬し崖下の川で溺死しそうになったときに「生きることを思え」を実践し瀉血によってその命を救い役に立つ外科医となったことを実証した。

医師として手をもって働く外科医をとくに尊敬していた

厳格に医術に従事するものは生涯をそれに捧げなければならない。これまでには人はそれを Hand Werker と名付けた。それは全く適切で正しい。これに従事するには手をもって働かなければならない。手、手がそれを試すためには、独自の生命が手を魂づけなければならず、彼女*自身の意志を持たねばならない。（*彼女とは手—女性名詞—のこと。）

ゲーテは解剖に興味を持ち立体的に観察、「造形的解剖学」を上梓

第2報でゲーテが顎間骨を発見したことは述べたが、人体の各臓器は相互に有機的な関連をもつことから「造形的解剖学」という概念を提唱し、ウイルヘルムの遍歴時代に次のように述べさせている。「医者というものは、葉を用いるにせよ、手で事にあたるにせよ、どんな医者でも、人体の内外の各部分に関するこの上ない精密な知識がなければ何の意味もない。そして、学校でその知識を習得して、この測り知れない有機体の多様きわまりない各部分の形態、位置、連関を表面的に理解しただけでは到底不十分なのだ。この知識この観察を繰り返して自己を鍛錬することと真剣にとりくむ医者なら、この生きた奇蹟の連関をたえず目と精神のまゝに新たにしておこうと、あらゆる機会を毎日求めるはずだ」と解剖学の重要性を説き、理想の医師は解剖を通して身体の連関を理解すべきとしている。

ウイルヘルムの修業時代・遍歴時代のドイツの医学教育にもヒポクラテスの言葉

ウイルヘルムはある日神父より修業証書を受けるが、自分で読むように勧められる。修業証書には「医術は永遠であり人生は短い。判断は難しく、機会は束の間である」というヒポクラテスの言葉が示されている。ウイルヘルムもこの言葉を学んで成長した。

要約

- ①ゲーテの医師観は「生を思え」（Gedenke zu leben）ということである。
- ②外科医を尊重し、作品のなかでウイルヘルムを医師として成長させた。シュヴァイツァーの生涯のなかにもゲーテの作品を垣間見ることができる。
- ③医学教育における解剖学の重要性を説き、そのために造形美術を積極的に利用して造形的解剖学という概念を提唱した。